



Title	WAYFINDINGを中心とする建築・都市空間の環境行動論的研究
Author(s)	舟橋, 國男
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37335
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	ふな 舟	はし 橋	くに 國	お 男
学位の種類	工	学	博	士
学位記番号	第	9 5 4 7	号	
学位授与の日付	平成 3 年 2 月 28 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学位論文題目	WAYFINDING を中心とする建築・都市空間の環境行動論的研究			
論文審査委員	(主査) 教授 紙野 桂人	教授 岡田 光正	教授 檜崎 正也	

論文内容の要旨

建築・都市空間の利便性・快適性の向上にとって、対象空間ならびにそれに至る経路構造の分かりやすさは基本的な要件である。近年、建築・都市施設の大規模複合化ならびに利用の一過的非定常化等両面の動向により、円滑な空間利用の困難が増大しつつあり、所与の環境条件と人間の行動特性との関係解明が求められている。

本研究は、建築・都市空間の物理的環境条件との関連における人間行動の実態ならびにそれに応ずる空間認識について、歩行における経路の選択・探索（WAYFINDING）行動場面に焦点を絞って環境行動論の立場から基礎的研究を行い、経路選択・探索行動の傾向と空間認識特性を見出し、環境デザインへの展望を試みている。

本論文は10章からなる。

第1章は研究の目的・方法・意義について述べ、研究課題を設定している。

第2章は、本研究の背景をなす環境行動論の特質と理論構造を把握し、建築計画学との関連を考察して新しい研究パラダイムの方向性を論じている。

第3章では、左右対称の等距離2経路からなる選択場面に関する実験的研究によって、進行方向に向かって左側経路選好・逆戻り経路忌避の傾向が認められ、さらに野外調査から推定されていた歩行における「目的への巨視的方向づけ」の作用が確認されている。

第4章では、格子状街路網地区における調査実験により、最寄り駅を通る交通機関軸との直交方向メインアプローチの出現、それを含む「境界線上歩行」と出発点・目的点間対角線沿い「階段状歩行」の発生、ならびにそれぞれに固有の性質・発生条件が示されている。

第5章は経路選択行動研究の主要課題とその研究現況をまとめ、一般的な「最短距離指向」によって解釈できない等距離複数経路の選択事態と迂回行動現象とについて論じ、歩行経路選択行動モデルを示している。

第6章では経路探索研究の現況とその課題を考察し、鍵概念の抽出・整理と相互の関連を考察して図式化し、環境の分かりやすさに関する環境条件ならびに行為主体の環境対処能力を論じている。

第7章では不整形街路網地区を対象に、3種類の初期環境情報（地形図学習、目的地への方向・距離情報、先導された追従歩行学習）の質的差異と、経路探索行動・空間認識の変化との関連を実験的に明らかにしている。

第8章では、不整形街路網地区において、2種類の空間認知表象（目的点への方向・距離による知覚連関表象と経路道順による運動連関表象）の差異と、「方向感」の保持・変容ならびに代替経路探索傾向との関係を実験的に捉えている。

第9章では、建築物内通路における経路探索行動・空間把握に対して、与件経路の空間的差異ならびに当該経路の初期教示方法（図面学習と先導された追従歩行学習）の差異が与える影響を実験的に求めている。

第10章は各章の要約、全体の総括、環境デザインへの展望と今後の研究課題を示して結論としている。

論文審査の結果の要旨

都市集積の高密度化ならびに都市機能の高度化にともない、都市・建築の空間環境は複合化・多層化・巨大化し、そこで活動する人間の環境適応に新たな負荷を及ぼしつつある。このような状況を背景として、空間環境の安全性・快適性向上の課題は、高齢化社会の進展ともあいまって、ますますその重要性を高めている。建築計画学における環境行動論的研究は、この課題に応じて、人間にとってより適応性の高い空間計画を導くことを目的として進められている研究分野である。本研究はその一端を担うものであって、建築・都市の空間における人間行動の基本的システムとして、歩行による移動途上での経路探索・経路選択（WAYFINDING）の、内在的条件及び外的情報環境に応じる心理的枠組みを把握し、その知見によって上記課題に答えようとしたもので、下記研究成果を得ている。

- (1) 環境行動論的研究に関する理論的背景ならびに国際的な研究活動の展開を明らかにし、あわせて建築計画学における本論に関わる研究課題を示している。
- (2) 生活行動に恒常的に組み込まれた人の移動における、近似的に等距離な複数経路の選択について、目的づけられた方向性（目的性）、空間条件の意味作用（記号性）、歩行行動の単純性（身体運動性）の関係要因を明らかにし、空間環境における人の集散に関わる基礎的計画条件を導いている。
- (3) 環境条件の「分かりにくさ」に対応する探索行動の実証的研究を行い、所与の条件の主体側の読み取りについて一定の傾向を明らかにするとともに、誘導操作の効果について客観的評価を示し、空間環境の「分かりやすさ」向上に向けての計画的取り組みを論じている。

以上のように、本研究は Wayfinding の心理的諸傾向を明らかにするとともに、人間にとってより適応性の高い建築・都市空間計画に新たな知見を加えるものであり、安全計画の上で貢献する所大である。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。